

群馬大学 教職大学院 News

NO. 4

2024年3月31日

発行
群馬大学教職大学院

群馬大学大学院教育学研究科・教職大学院 〒371-8510 前橋市荒牧町4-2 TEL027-220-7223 URL <https://sites.google.com/gunma-u.ac.jp/kyoshoku>

教職大学院の研究・実践と地域教育界をつなぐ

専門職学位課程長 音山 若穂

今年度は授業実践開発コース11名、教職リーダーコース8名、そして特別支援教育実践開発コース1名の計20名が、第3期生として修了することとなりました。これで、拡充後の修了生は60名。2008年の創設時から通算して15期、200名を超える修了生が県内外の教育現場を最前線で支えています。

教職大学院は、現職教員や学部卒学生を受け入れ、リーダーシップや実践力を備えた教員を養成する役割だけではなく、地域教育界に向けて幅広く教職大学院での学びの成果を提供していくという役割も期待されています。写真は毎年行われている、群馬県教育委員会との連携事業として行われているシンポジウムの模様です。本年度は森下由佳先生（現・沼田市立沼田小学校教諭）が自身の大学院での



課題研究と実践について報告しました。ハイブリッド形式で行われるこのシンポジウムには、県内外の教育関係者も多く参加し

て、自らの授業づくりの参考になったなど、現職教員からも高い評価を得られています。群馬大学の



教職大学院は1学年約20名。一人一人に寄り添った指導を考えると決して少ない数ではありませんが、とはいえ、県内外の教師全体の数からするとごく僅かです。私たちは、もっと多くの先生方に、教職大学院での研究や実践の成果を届けることができればと思っています。

お知らせです。2024年12月14日（土）・15日（日）の2日間、日本教職大学院協会研究大会が群馬大学荒牧キャンパスで、ハイブリッド形式で開催されます。全国の教職大学院の研究・教育の取組や、院生や修了生の発表、そしてパネルディスカッションが行われます。教職大学院のことを詳しく知りたいと思っている皆さん、入学を考えている皆さんにとっても、教職大学院のことを詳しく知ることができるよい機会だと思います。ぜひご参加ください。お待ちしております。

令和5年度 大学院教育学研究科(専門職学位課程)学業優秀者



令和5年度大学院教育学研究科（専門職学位課程）修了生の中から、学業優秀者（本学における学業、卒業研究等の成果が優れていると認められる者）として、特別支援教育実践開発コースの佐藤舞さん（群馬県立赤城特別支援学校）が学長より表彰されました。

佐藤舞さん、おめでとうございます。



目次

教職大学院の研究・	
実践と地域教育界をつなぐ……………	1
教職リーダーコース……………	2

授業実践開発コース……………	6
特別支援教育実践開発コース……………	11

教 職 リ ー ダ ー コ ー ス

教育課題の解決に資する学級・学年・学校経営を推進する力、児童生徒の実態に応じた実践的指導力の両者を兼ね備えたミドルリーダーの育成を目指します。

公開授業・実践検討会報告

道徳科授業の質の向上を目指して —授業改善と校内組織への働きかけを通して—

筏 井 隆 平 (伊勢崎市立境剛志小学校)

11月10日、筏井隆平さんの実践検討会が開催されました。

筏井さんは上記のテーマに、①「教材分析シート」の活用や発問、板書の工夫などを通じた授業改善、②「パッケージ型ユニット」の導入、家庭・地域との連携などカリキュラム編成、③校内研修での教材研究など校内組織への働きかけ、といった手だてを通じて取り組んできました。

当日は、こうした研究成果の一環として、4時間構成の



「パッケージ型ユニット」の第2時となる授業「プランコ乗りとピエロ」〔相互理解、寛容〕が公開されました。

考えたことを隣同

士で交流する場面などを挟みながら、相手の認めるべきところは認めつつ、改めてほしいことを指摘するようになったピエロの認識・心情の変化が押さえられました。

最後に、伊勢崎市教育委員会学校支援係の櫻澤直明指導主事より、本時を貫く中心発問の明確さ、これまでの積み重ねを通じた発言しやすい授業の雰囲気、児童の意見が反映された板書などについて高い評価をいただくとともに、登場人物の道德性についての読み取り、話しあうことから聴きあうことへの発展など課題の指摘もいただきました。

(文責：山崎 雄介・平林 茂・鈴木 豪)

自分たちで考え、判断・決定し、行動 できる児童を育成する学級活動

—学習サイクルに基づいた係活動と学級会を通して—

今 井 紀 恵 (高崎市立東部小学校)

11月28日に今井紀恵さんの実践発表（公開授業）及び実践検討会が行われました。

今井さんは実践研究の中で、「①問題の発見・確認→②解決方法等の話し合い→③解決方法の決定→④決めたことの実践→⑤振り返り→次の課題解決へ」という学習サイクルを、担任を務める5年生の学級の児童が自分で回せるようになるための支援を積み重ねてきました。特に係活動では児童が「学級を楽しく、仲良く、賢くする活動を行うこと」を目的として、その頭文字をとった「タナカさんを目指す」ことを合言葉にして係活動を行ってきました。

実践発表は、2学期の係活動の振り返りから確認された課題の具体的な解決方法を話し合って決定し、次の実践に繋げるための授業を公開しました。前時に、児童は係ごとに学級の他のメンバーからの評価を数個ずつ受け取りました。その中から改善の必要がある「Mottoタナカさん」を1つ選択し、実際何ができるかを個人で考えて付箋紙に記述しました。本時では、考えたことを係で発表し合いながら、改善策について具体的に話し合っていました。



最後に、高崎市教育委員会の星野浩指導主事より、本実践において係活動の目的と振り返りの視点が児童に共通理解されていることや、自分たちの活動に関わるMottoの前にGoodが十分伝えられていることの良さなどを評価していただきました。

(文責：大島みずき)

生徒エージェンシーを高める授業改善 —中学校数学科を中心とした自律性支援を通して—

上 田 将 大 (富岡市立富岡中学校)

10月27日、上田将大さんの実践発表と実践検討会が行われました。

テーマの「生徒エージェンシー」は、「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」(秋田他、2020)とされ、次期学習指導要領にも反



映されるともいわれています。

上田さんは、生徒エージェンシーを育むために、生徒と共同で授業

を構成することを意識し、数学を中心とした授業実践を行ってきました。日々の数学授業では、「生徒に学習方法を選択させる」などの工夫に加え、「授業を振り返る会」として、生徒たちが自身の授業中の様子を動画で振り返り、良い点や改善点を考える実践も行ってきました。加えて、生徒エージェンシーについて情報発信したり、生徒の自律的な学びを支える自律性支援についての研修を開催したりと、学校全体を巻き込む実践も行ってきました。

実践発表と実践検討会では、上田さんからの研究説明に続いて、1年生の数学授業が行われ、参加者はそれを周囲で参観しました。続く研究協議では、まず、授業に出席した5名の生徒に対して、参加者からの質疑応答が行われました。「数学班での学びなど、生徒からの要望によって授業方法が変わっていること」などが生徒の言葉で語られました。

その後、協議会の参加者がいくつかのグループに分かれて協議を行った後、西部教育事務所の岡部隼人指導主事から指導助言をいただきました。「生徒が先生を活用し、動かして授業が構成されている様子が見られた。生徒が必要感をもって授業に臨んでいる」というご講評をいただきました。（文責：鈴木 豪・立見 康彦・佐藤 浩一）

コミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校と地域の連携・協働体制の構築

～地域学習カリキュラムの実践と改善を図る
校内研修を通して～

岡 村 朋 也（高崎市立吉井西小学校）

岡村朋也さんの実践検討会が、11月6日に行われました。

前年度、勤務校の職員に行った聞き取り調査から、個々の教員の力を協働の場で発揮できていないこと、教職員間のコミュニケーションの機会が不足していることなどの実態が明らかになりました。また、学校支援コーディネーター等との連携が十分にできていないという課題も明らかになりました。

そこで岡村さんは、地域連携担当教員の働きを活性化させ、学校と地域による意見交換や地域人材参加型の校内研修を行うとともに、生活科や総合的な学習の時間で行う地

域学習の充実を図ることにしました。

今年度、岡村さんは研修主任と地域連携担当を兼ね、地域の方々を招いた意見交換会を行い、また、校内研修全体会にも地域の方々に参加していただくことで、学校と地域が協働することの意義を双方が実感することができました。

実践検討会当日、4年生の担任である岡村さんは、総合的な学習の時間「地域の伝統芸能について考えよう」の12時間目を公開しました。

その後、検討会が行われました。課題研究成果発表とそ



れに対する質疑応答の後、5つの班に分かれて公開された授業についての協議に移りました。

最後に、高

崎市教育委員会の山田芳紀指導主事から指導講評がありました。校内研修に地域の方々に入っていただくことで、研修内容が深まっていることや、生活科と総合的な学習の時間を軸とした地域学習が充実できていることについて、肯定的な評価をいただきました。（文責：高橋 望・野村 晃男）

普通科進学高校におけるインターンシップの充実

～探究活動への位置付けと

事前・事後学習の再考を通して～

岡 本 隆 司（群馬県立高崎北高等学校）

11月9日、岡本隆司さんによる公開授業（1・2年生による探究活動の成果発表会）と実践検討会（授業研究会）が開催されました。

高崎北高等学校では、令和元年度から群馬経済同友会や外部アドバイザーと高校が連携し、生徒のインターンシップを実施することに取り組んできました。その後、コロナ禍によるオンライン形式の導入や全面中止など曲折を経て、本年度は240名が「探究型インターンシップ」に取り組んできました（うち149名はインターンシップ先を自己開拓）。11月9日には、1年生は自分が企業などでインターンシップをして得た経験を、今度は他の生徒に



発表するというのを、240名全員が、1人10分で10人が24会場で、110分にわたり発表しました。

これが2年生では個人での「テーマ探究」に深化・進化していきます。この中間発表が、同じ11月9日に、やはり240名全員によって行われました。

以上の生徒による発表が終了した後、県内でこうした「探究型インターンシップ」を取り入れようとする総勢13校の中学・高等学校の先生が参加し、北高の教員主催の実践検討会（授業研究会）が実施されました。その中で最初に、選出された1年生2人による「探究型インターンシップ学習」の報告がなされました。その後、岡本さんによる現時点での課題研究の成果の発表がなされました。岡本先生の課題研究が着実に進んでいることがうかがえる発表でした。（文責：山口 陽弘）

若手教員を育成する校内体制の構築と実践

～メンターチームによる若手教員への支援を通して～

上ノ内 道（渋川市立渋川中学校）

11月27日、上ノ内道さんの実践検討会が行われました。

前年度、勤務校の職員に行った聞き取り調査や観察から、若手教員への支援に関して、強みと共に、学年により支援体制の差が大きいこと、校内で組織的な取組が弱いこと、メンター研修の実施日やテーマ設定があいまいなど、課題も明らかになりました。

また、若手教員は、教科指導、生徒指導、学級経営について悩みを抱えていることが分かりました。

そこで、個々の若手教員の悩みや困り感を踏まえ、若手教員と中堅・ベテラン教員による協働的な学びの場づくりを通して、若手教員育成に向けた支援を行おうと考えました。

具体的には、メンターチームが中心となって行う初任者研修の年間6回のメンター研修を「定期的な研修」として年間計画に位置づけました。また、若手教員の希望や必要感に応じて行う「即時的な研修」も設定しました。メンターとメンティは、教科と学年のつながりを重視しながら人選するとともに、研修主任である上ノ内さんがメンティの困り感に応じて、研修のテーマや講師を調整してきました。

実践検討会当日は、「道德教育について」というテーマのメンター研修を公開しました。

上ノ内さんが進行役となり、前半では、若手教員の困り

感に沿って意見交流が行われました。また、後半では、2年「足袋の季節」を教材文として、前半の解決策を意識しながら、具体的な発問や活動など授業づくりについて話し合いました。

その後、実践検討会が行われました。上ノ内さんの実践説明と課題研究成果発表の後、質疑応答が行われました。メンター研修の参加者からも研修の成果についての感想等が発表されました。

最後に、渋川市教育委員会の小暮和宏次長から、課題研究について、実態を踏まえ、組織的な若手育成の校内体制が整っていること、メンター、メンティ両者にとって学びのある研修となっていること等について、肯定的な評価をいただきました。（文責：高橋 望・野村 晃男）

メンター・OJT研修を通じた困り感・多忙感の解消

高橋 克行（太田市立九合小学校）

課題研究にかかわる実践のまとめとして、高橋さんがリーダーとして主宰するメンター研修が、12月15日に行われました。

高橋さんは、メンター研修を中心として、教員側の業務遂行能力の向上を実現することで、個別の業務にかかる労力や所要時間の削減を通じて、間接的に「働き方改革」に貢献することを目指してきました。

こうした実践の一環として、学校の危機管理、保護者対応などをテーマとしたメンター研修や、メンティ以外も参加したOJT研修として、英語の授業づくりについての研修などを高橋さんは企画してきました。

その一環として、研修にメンティとして参加している教員がそれぞれ、勤務校で授業力に定評のある先生方の授業を参観するという取り組みが2学期後半に行われました。12月15日当日は、5名のメンティから、それぞれ参観し

た授業の概要と、そこで何を学んだかが報告されました。

授業を観せてくださった先生の中には、授業当日の放課後に研



究会を開いてくれた方もあったということです。そのほかにも豊かな学びがあったことは、メンティからの報告がすべて、予定の報告時間に収まらなかったことに象徴されています。

研修の最後には、後藤秀幸校長、石原真恵教頭から、高橋さんの実践に対する評価と、ねぎらいの言葉をいただきました。（文責：山崎 雄介）

互いに寄り添いあう支援システムの充実 —児童支援シートを使用した生徒理解と 支援チームの定着を通して—

増 山 肇（館林市立第一小学校）

12月14日、増山肇さんの実践検討会が行われました。増山さんは、全ての児童を対象とした支援シートを活用しながら児童理解と支援チームの定着をはかることで、生徒指導を計画的・積極的なものとし、生徒指導・教育相談の「ジョブクラフト」化を目指しました。取り組みの柱となるのは次の3つです。

1点目は、「児童生徒理解をはかるための取組」です。児童支援シートを活用し、複数の教師で複眼的な広い視野から児童生徒理解ができるようにしました。2点目は、「支援チームの定着の取組」です。本実践では増山さんの所属学年である4学年を中心に、チームづくりを進めました。道徳の授業をローテーションで行ったり、教師が一人で抱え込まずに、どんなことでも話せるようにするための雰囲気づくりをしたりするとともに、学年、生徒指導・教育相

談部会との連携にも取り組みました。そして3点目は「ソーシャルスキルトレーニングの取組」です。児童のソーシャルスキルを高めることで児童がSOSサインを発しやすくなり、教師対児童、児童同士の共感的な関係が作られることで、より一層児童のニーズにあった支援が可能となると考えられます。

検討会では増山さんの一連の取り組みを振り返った後、活発な意見が交わされました。

本研究は取組としてはスタートアップの段階であり、本年度は増山さんの所属学年を中心に行われました。今後はこの実践を全学年に発展させ、学校全体で体系的に児童理解とチーム支援を進めていくことが課題となります。児童と教師の双方のWell beingを達成すべく、増山さんは修了後も引き続きこの実践を進めていきたいと考えています。（文責：音山 若穂）



M2 課題研究報告会

教職リーダーコースの課題研究報告会が、2024年2月10日（土）に開催されました。まず、他の2コースと合同の全体会において、群馬県教育委員会の栗本郁夫教育



次長と本学の藤森健太郎教育学研究科長より挨拶を受けた後、コースごとに分かれ、本コースでは8名の2年生から課題研究

についての報告と質疑がありました。

各報告について熱心な議論が行われた後、教職リーダーコースの懸川武史・課題研究評価部会長と、群馬県教育委員会学校人事課の井上詔司管理主事から指導講評を受けました。

恒例の、コースでの優秀者表彰の対象としては、岡村朋也さん（高崎市立吉井西小学校）の報告「コミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校と地域の連携・協働体制の構築～地域学習カリキュラムの実践と改善を図る校内研修を通して～」が選出されました。

M1 中間報告会②

教職リーダーコース1年生の中間報告会が、2024年2月16日（金）に開催されました。

冒頭に、年末に逝去されたM1の濱野香織さんのご冥福

を祈って参加者全員で黙禱を捧げた後、6名の院生から、前期の第1回中間報告会以降の実践の進展と、次年度、勤務校での実践研究の構想について報告がありました。

授業実践開発コース

教科に関する深い学問的な知識・理解を身につけた上で学習内容の系統性や教科の本質を理解し、教室の事実に基づいて授業実践を分析し、省察を行う実践的な指導力を持つ教員の育成を目指します。

2年間の学びを振り返って

亀井 千恵子（みどり市立大間々北小学校）

令和2年3月、コロナウイルス感染症対策のための臨時休校。学びが止まるという初めての経験。毎日子どもたちの前に立って授業をするという当たり前のことができなくなり、誰もいない教室で、「教師の役割って何だろう」と考え続ける日々。教師としての自身の在り方をもう一度見つめ直したいという思いから、教職大学院への進学を決意しました。

1年次は大学院で横断的・総合的な学習指導や授業研究の在り方などを学びました。経験年数や校種の異なる仲間たちと教育について意見を交わす時間は、凝り固まった私の考え方を柔軟にしてくれる、非常に充実した時間でした。また、先進校や公開研究会に足を運び、たくさんの授業を参観したり、授業研究会に参加したりすることを通して、自身の学習指導上の課題を解決するためのヒントを得ることができました。

2年次は現場に戻り、所属校での授業実践を進めました。私は算数科の授業において日々感じていた課題を改善するべく、子どもたちが日々の授業で抱えている分からなさを原動力に対話を活性化させ、深い学びにつなげることを目的として、課題研究を行ってきました。どうしたら子どもたちが抵抗なく分からなさを表出できるのか、表出された分からなさをどう生かせば対話の活性化につながるのか、日々の授業で試行錯誤を繰り返しながら、教師としてできることを探っていました。1年次の学びを活かして課題解決のための手立てを講じ、実践し、省察する。この過程

を何度も繰り返す中で、授業を通して子どもたちと真剣に向き合うことの大切さを改めて実感し、教師として果たすべき役割の一端が見えたような気がしました。業務と研究のバランスが上手く掴めず、また、なかなか思うような成果が得られなくて、指導担当の先生方の前で悔し涙を流したこともあります。そんな時、先生方は励ましの言葉や的確なアドバイスをくださいました。課題研究だけでなく、教師としての私自身を支えてくださった先生方がいたからこそ、私は省察的实践者で在り続けることができたのだと思います。本当に感謝しています。

2年間の学びを終えた今、ここはゴールではなく、新たなスタートだと感じています。この2年間の学びを広めていくことで、日々の授業づくりに悩む現場の先生方の力になれば嬉しいです。そして、今後も学び続ける姿勢を忘れず、目の前の子どもたちや教育課題と真摯に向き合っていきたいです。



課題研究紹介

中学校の体育授業における「できるようになる」を目指した指導のあり方の検討
—運動感覚（動く感じ）と課題解決場面に着目して—

岩崎 安里寿（ストレートマスター）

体育授業において、運動の行い方を「わかっているけどできない」子どもがいることや、課題解決の際に自分の課

題を正確に把握して、それに合った練習をすることができない子どもがいることを課題として取り上げ、これらを解決するために、「わかるとできる」の関係を明らかにし、課題解決場面を有効なものにするための指導方法として、4つの観点（デジタル教材の作成、教材の工夫、教師の指導、学習カード）で「技能向上を目指した指導方法及び手立て」を作成しました。

本研究では、技能差が大きく、共通の課題を設定するこ

とが難しい領域であるマット運動を取り上げ、中学校1年生102名の生徒を対象に授業実践を行いました。

自身が作成した教材について、はじめにデジタル教材では、ロイロノートの中が多くの配布資料で使いにくくなり、見たい資料を探すのに時間がかかっていたため、1枚のシートに全ての技、つまずきとポイントを入れるようにしました。そして、つまずきや課題をより明確に把握し、自分のすべき練習やポイントを把握して練習できるように練習方法の配列を樹形図型へ変更しました。次に、学習カードでは、単元の見通しをもつことができ、前時までに獲得した運動感覚やコツを振り返りながら学習できるように、1枚のシートに課題や運動感覚を記入しポートフォリオとして振り返ることができるワンページポートフォリオにしました。

実践を通じた成果として、技の得点については、開脚前転では2.93点から4.91点、開脚後転では3.51点から5.14点、倒立前転では2.32点から4.91点であり、いずれも単元前後で有意な向上がみられました。また、単元前



後に行った診断的・総括的授業評価の結果では、合計得点、各因子いずれも5段階中「5」であり、生徒から高く評価されました。特に評価が向上した項目は、「心理的充足」、「運動の有能感」、「できる自信」の3つであり、これらのことから本研究の手立てにより、生徒は体育授業に満足し、自身の技能の向上を感じながら、運動に自信をもって授業を受けることができたと考えられます。

今後においては、作成した「指導方法及び手立て」が他校種でも有効なのか、他教科を専門とする教師においても活用が可能であるかを明らかにしていく必要があると感じています。

大学院での2年間を通して、自身の授業力を大いに向上させることができたことはとてもうれしく思います。これからの教員人生において、今日までに学んできた多くのことを教育現場に還元していけるよう努めていきたいです。

2年次院生の学びの場：授業実践開発実習Ⅱ

～サポートワークショップ～

サポートワークショップは、2年次の実習において、授業の実践・分析・考察を進めていく中、実習の状況や課題解決の進捗について報告し合い、以後の課題解決の見通しを持つために院生同士で相談を行う機会として、毎月1回2時間の計8回設定しています。



2年次は、授業実践開発実習Ⅱとして、それぞれが実習校で実践を行います。月に1度のサポートワークショップによって、同期の院生や教員と顔を合わせ、悩みや課題を共有し解決の見通しを持つことで、自身の課題研究を次のステップへと進めていくことができました。



令和5年度 課題研究報告会

令和6年2月10日

令和5年度課題研究報告会を2月10日に開催（対面・オンラインのハイブリッド形式）し、2年次院生11名が2年間の課題研究の内容と成果を報告しました。昨年度は天候により急遽オンライン開催となったため、コース初の対面開催となりました。院生同士の質疑も活発に行われ、最後に群馬県教育委員会の横山指導主事に指導講評をいただきました。多くの方にご参加いただき感謝申し上げます。課題研究題目は下記の通りです。

2年次院生の課題研究題目

青木 翔（ストレートマスター）	「思考力、判断力、表現力等」を育成する体育授業の在り方の検討ー小学校中学年におけるラグビーの授業実践に着目してー
赤坂 健介（ストレートマスター）	数的な知識を身につける振り返り活動の実践
新井 京介（玉村町立玉村中学校）	「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指した理科指導に関する実践的研究ー評価規準とフィードバックの枠組を活用してー
有富はじめ（ストレートマスター）	外国人生徒の漢字を読むストラテジー能力の向上を目指した授業実践研究ー英語の「問題指示文」を理解するための漢字学習の試みを通してー
岩崎安里寿（ストレートマスター）	中学校の体育授業における「できるようになる」を目指した指導のあり方の検討ー運動感覚（動く感じ）と課題解決場面に着目してー
岩田 龍真（ストレートマスター）	図画工作科における衣服に関する題材開発ーファッションに基づく視点からー
金井 亨平 （下仁田町立下仁田小学校）	思考力、判断力、表現力等の育成を目指した小学校体育科における授業づくりー映像視聴による話し合いの深まりとパフォーマンスに着目してー
亀井千恵子 （みどり市立大間々北小学校）	小学校算数科における対話的な学びの活性化に焦点を当てた授業づくりについての研究ー児童の問いの表出と共有に着目してー
中里亜沙望 （群馬県立伊勢崎商業高等学校）	高等学校国語科における「読むこと」の指導の改善ー協働的な学びを通じた想像力の育成ー
根岸 愛美（富岡市立富岡小学校）	小学校社会科における主体的に学習に取り組む態度を高める授業と評価のデザインー外部人材を活用し、実社会とつなげた単元モデルの提案ー
目崎 智美（ストレートマスター）	小学校図画工作科における児童の創造性を育む環境づくりー空間に関する実践題材を通してー



1年を振り返って

新たな学びと絆を深めた1年間

湯 浅 隆 史（安中市立磯部小学校）

今年は現場から少し離れ、自分自身の学びを深める1年間となりました。振り返るとあっという間の1年間であり、それだけ充実した日々であったと感じています。

大学院の授業では、現場での実践につながる理論的な部分を学ぶことで、「学習科学」や「今の教育やこれからの教育に求められること」などを根底から理解し、今までの自分自身の実践を振り返ることができました。今までは、目の前の子どもたちや教科といった狭い視点で考えていたことが、教育という大きな視点を持ったうえで考えられるようになったと感じています。

授業に位置づけられている実習として先進校の授業参観や研究会、学会等へ数多く参加できたことも学びを深めることに繋がりました。教育について熱心に考える多くの先生方や研究者の方々の実践を見聞きすることで、新たな学

びを得るとともに良い刺激を受けることができました。

また、大学院で出会った仲間たちからもたくさんの学びと刺激を得ることができました。年齢や校種、専門教科の違う仲間たちと授業の中で真剣に語り合うことは、本当に楽しくかけがえのない時間であったと感じています。まだ現場に出ていないストレートマスターの仲間たちと同じ熱さで語り合うことができ、頼もしさを感じるとともに、自分自身も先輩としてさらに成長していかなければという思いを持ちました。

来年度は現場へ戻り、今年学んだことを生かしながら目の前の子どもたちのために日々実践を行っていきます。授業の中でも言われていた「理論と実践の往還」を体現していきたいと思います。

1年を振り返って

貴重な時間の中での出会いと学び

高 橋 宏 太（館林市立第六小学校）

最近、小学校で体育主任を務めることが多くなり、同僚に体育授業について助言することが増えてきました。しかし、伝えている内容は現場での経験から得られた知識ばかりで「本当にこれでよいのだろうか？」と疑問に感じていました。そんな時に、教職大学院で学ぶ機会をいただけたことは、本当にありがたかったです。

教職大学院の授業では、現場では知ることのできなかった教育理論について学び、今までの経験や現場の実態と照らし合わせながら同じ立場の現職の先生方やストレートマスター達とディスカッションしました。校種や専門教科、年齢も異なるけど同じ志をもつ仲間と多くの時間を共有できたことは、仕事をしていく中で何にも代え難い財産となりました。授業以外でも先進校への視察に行ったり研究に

ついて協力してくれたり頼もしい存在です。また、授業を担当してくださった先生方は、勤務校の実態を踏まえ、次年度の実践に向けて親身になって相談に乗ってくださいました。昨年まで自分が行ってきた授業とは明らかに違う内容を練ることができました。

今年度は、後期期間に勤務校での授業実践も行いました。実践する中で多くの課題が見つかり、来年度の本実践に向けて貴重な機会となりました。トライアルアンドエラーを繰り返し、時間をかけてより良い内容にしていけるところが教職大学院の最大の魅力だと思います。

これからも理論と実践を往還する中で『児童の姿を通した授業改善』に努め、よりよい体育授業を広めていければと思います。

授業実践開発実習Ⅰ報告

新たな教育観を得られた実り多き1年

栗 田 裕 康（渋川市立金島小学校）

群馬大学を卒業して早12年。再び学び舎に還り、まだまだ教師として学ばなければならないことが多かったと自覚できた1年となりました。今までの教員生活で、諸先輩方から技を吸収し、自分の教え方のスタイルが確立した中

堅教師になれた、と自負していましたが、様々な講義や実習を通して、自分の教師としての技量には、まだまだ伸びしろがあると考えさせられると同時に、多くのアイデアが生まれ、早く現場で実践してみたいと感じる日々でした。

教育の現場に立っている時は、日々の授業や公務分掌に追われ、教育書や専門教科以外の学習指導要領、論文に目を通したり、公開研究会へ参加したりする、自己研鑽の時

間がなかなか確保できていませんでした。大学院では、じっくりとそれらに向き合う時間が設けられ、自分の目指す教育の拠り所を得ることができた様に思います。授業実践開発実習Ⅰでは、様々な先進校の授業参観を通して、子どもの生き生きとした姿とそれを生み出す教師の仕掛け、発問を多く見かけ、自分の授業でも取り入れてみたいと多くの刺激を受けました。授業後の研究会でも、全国から集まった先生方と意見交流をし、県内の研究会だけでは得られない、それぞれの地域の教育観に触れる機会もありました。

また、県内でも多文化共生の進んでいる東毛地域や他校

種である附属中学校の授業参観、附属幼稚園での保育自習も貴重な経験でした。今後の更に加速するであろう国際化社会で、教師が持つべきインクルーシブ・マインドの大切さに気が付くことができました。小学校勤務の経験しかないため、中学校との学習内容、技能のつながりや、附属幼稚園ではどのような保育を心掛けているのかについても知れ、小学校1年生、6年生ではどのような指導をしていくべきなのか改めて考えさせられました。2年次では、置籍校に戻り、実習や講義で得た「理論」と「実践」を往還できるような励みたいと思います。

1年次院生の課題研究レビュー検討会・課題研究計画検討会

本年度は課題研究レビュー検討会を8月7日、課題研究計画検討会を2月16日に開催しました。下記は、1年次院生の課題研究テーマです。

天竺 奈々（桐生市立神明小学校）	児童のウェルビーイングの向上を促す役割カードを活用した学習プログラムの検討
稲田 直登（ストレートマスター）	見通しを立てる力の向上を目指した中学校数学科における授業開発
岩崎 紘乃（ストレートマスター）	失敗の原因を運動能力に帰属させない小学校体育授業の指導のあり方—原因帰属理論に着目して—
栗田 裕康（渋川市立金島小学校）	学習方略「社会科ナビゲーター」を活用した問題解決的な学習の指導モデルの開発
茂原ひなた（ストレートマスター）	「Water competence」の育成を目指した水難防止教育～教科等横断的な安全教育の取り組み～
高橋 宏太（館林市立第六小学校）	小学校体育授業における運動有能感を高めるための実践研究—協働的な学びの場に着眼したボール運動「ゴール型」の授業づくり—
竹市 葵（ストレートマスター）	児童間の相互交流を通して想像力を育成する「読むこと」の指導の在り方
塚越 史香（前橋市立箱田中学校）	中学校英語科「話すこと〔やり取り〕」における生徒の即興力の育成—生徒の発話を促す教師の働きかけ—
西野 広紀（ストレートマスター）	中学校英語科における学習不安の軽減を目指した授業実践研究
平井美千代（沼田市立沼田南中学校）	中学校音楽科鑑賞領域を中心とした「学びの活用」の授業デザイン—教科等横断的な学習を取り入れた授業実践に着目して—
松尾 友子（太田東高等学校）	高校英語科における「話すこと〔やり取り〕」の言語活動の工夫と教師の支援の在り方—論理的に伝え合う力の育成を目指して—
松本 春菜（群馬県立板倉高等学校）	実用的な文章を書くことに困難を抱えている生徒への指導に関する研究
山本 惇裕（ストレートマスター）	数学の学習におけるエージェンシーの育成—「協働的な学び」の場に焦点を当てた授業デザインを通して—
湯浅 隆史（安中市立磯部小学校）	体育授業における運動が苦手な児童にもゲームでの成功体験を保障する指導方法の開発
湯本 祥伍（ストレートマスター）	物語世界についての児童の想像を豊かにする学習課題・学習環境デザインの検討



1年次課題研究レビュー検討会の様子



1年次課題研究計画検討会の様子

特別支援教育実践開発コース

特別支援学校・特別支援学級・通級教室において重度化・重複化、多様化する教育的ニーズ、インクルーシブ教育に対応できる教育学、心理学、医学、福祉に関わる専門的な知識を持つ教員の育成を目指します。

2年間の学びを振り返って

佐藤 舞（群馬県立赤城特別支援学校）

今、群馬県の病弱教育は転換期を迎えています。数年前まで、小児慢性疾患で入院し・転入するケースが多い状況でしたが、精神疾患及び心身症（以下、こころの病気）の診断を受け、入院・転入する小・中・高校生が増加傾向にあります。こころの病気の背景や原因は複合的であり、現代の日本では、不登校や自殺、いじめ、虐待、ヤングケアラーなど、深刻な社会問題があります。さらに発達障害の二次障害として、こころの病気を発症しているケースも散見されます。

そのため、こころの病気の子ども理解や、支援の方向性を検討していくためには、私たち病弱特別支援学校における「院内教室」での子どもの姿だけでは非常に難しく、日々、地元校や医療・福祉との連携の必要性を感じています。

昨年度、置籍校・医療機関・地元校の三者の視点を取り入れたガイドブックを作成するにあたり、インタビューを中心としたフィールドワークを重ねてきました。その際、最も大事にしてきたのは、「いかに他者視点に立てるか」という点でした。自分たちの立場のみで、連携を捉えているうちは、いつまで経っても、連携の本質には近づけないのではないか、これが、これ

まで勤務する中で常に感じてきた思いでした。医療関係者や地元の小中学校の先生方へのインタビューを通して、校種や業種を越えた「チーム支援」の大切さを再確認することができました。

そして、今年度は、実際に活用・検証するとともに、効果的な連携を構築するための運用についても検討を重ねてきました。現場に復帰して感じたことは、「理論と実践の往還」の重要性です。実際に作成者である私以外の支援者に活用してもらう中で見えてきた効果や課題などが整理できた貴重な一年となりました。

2年間の振り返り、現場で働くだけでは得られない、かけがえのない出会いと経験をさせていただきました。学校としての研究はまだスタートラインに立ったばかりであるため、今後も研究に磨きをかけ、本研究が、すべての病気療養児の支援に役立つものとしていきたいと思っています。

2年間、温かくご指導いただきました霜田浩信先生、峯岸幸弘先生をはじめ、お世話になったすべての方々へ心より感謝申し上げます。

課題研究紹介

教職大学院での1年間の学びから

一刺激を受けること、考え続けることの大切さ

菊地 香央莉（群馬県立渡良瀬特別支援学校）

「インクルーシブ教育とは何ですか？」「教育を取り巻く制度・法律を知っていますか？」「子どもを見るって何をすることですか？」教師をする上で一度は考えていいテーマだと思います。ただこのような問いすらも入学前の私は考えることや学びを怠ってきました。教師の多忙が叫ばれる昨今、私のように怠ってしまっている教師はいるのではないのでしょうか。

教職大学院で学ぶ機会を得てとても幸運でした。一度立ち止まり、考える時間・知る機会が多分にある1年間だったからです。必要な知識を得たり、考え続けなければいけない教育課題に対して向き合ったりする時間がたくさんありました。専門的な深い知識を持った教授陣からの話題提供や講義内容は、とても新鮮で興味深いものばかりでした。同期となる院生たちとの

会話も刺激的でした。ストレートマスターも現職も区別なく、講義内や院生室等でたくさんの経験や考えを話しました。異年齢・異校種の人の見解を聞くことで、特別支援教育についての自身の考えが深まりました。教授陣や院生同士との係わりは貴重な財産になりました。

様々な刺激を受ける中で、自身の研究は何がよいのかとても迷いました。現在は、教師間の協働を軸とした授業づくりをテーマに進めています。特別支援学校においてティーム・ティーチングでの授業が行われております。単に業務を分担するにとどまらず、授業づくりから振り返りまでを協働することで、専門性が向上したり、子どもに合った授業実施したりすることができのではないかと考えています。様々な授業を参観し、自身の授業を振り返り、授業づくりで行ってきた事（良かったこと・反省点）を整理して言語化しました。よりよい授業づくりをくりかえし行えるようにプロセスを整理しました。来年度は、実際の現場に戻って、プロセスに基づいた授業を行う中で、「特別支援学校における授業づくり・授業改善について」を考え続けブラッシュアップしていきたいです。

教職大学院での1年の学びから

—教師と子どもが相互に教え、教えられる関係性—

久保田 有 香（群馬県立館林特別支援学校）

私は、特別支援学校での勤務経験においてこれまでたくさんの児童生徒と共に過ごしてきました。児童生徒の中には、言葉が話すことが難しかったり、身体を思うように動かすことが難しかったりする子どもも多く、コミュニケーションに難しさを感じる機会が多くありました。また、コミュニケーション支援として、ICT機器を使っの活動なども行いましたが、本当に子どもの意思を読み取ることができているのか疑問を感じていました。

大学院での講義を通して、コミュニケーションを行うためには、教師と子どもとの間で相互に教え、教えられる関係性を作り出すことが重要であることを学びました。また、子どもにコミュニケーション手段を獲得させるのではなく、まずは教師自身が子どもの思いを読み取る姿勢を持つ必要があることを学びました。そこで、課題研究では、重複障害児の能動的コミュニケーションを促すための係わり方について取り組んでいきたいと考えました。9月に置籍校で行った課題発見実習では、子どもとコミュニケーションを取ろうと意識しすぎるあまり、子どもの意思を読み取るのではなく、私自身が考えている活動の流れに子どもを誘導してしまうことが多くなってしまいました。なかなか思うようにコミュニケーションを取ることができず、子どもの意思を読み取ることの難しさを実感しました。実習での活動を振り返る中で、指導教員の先生方からご指導いただき、教師の考えた活動に子どもを誘導するのではなく、子どもが行っている活動からコミュニケーションの場面を作り出していくことの大切さを知ることができました。また、そこから子どもが何を思っているのかを読み取り、活動内容を考えていくことの重要性を改めて学びました。

来年度の実践では、教師として子どもと相互に教え、教えられる関係性を築くことができるように、子どもの思いを読み取ることを常に意識して係わりながら、たくさんコミュニケーションを取っていききたいと思います。また、大学院で学んだことをたくさんの先生方に伝え、共に実践していくことで、特別

支援教育についての学びをさらに深めていきたいと思っています。

ご指導くださった先生方をはじめ、たくさんの方々に出会い、支えていただいた1年間でした。心より感謝申し上げます。

教職大学院の1年間の学びを通して

～教師の在り方について～

斎藤 駿 佑（ストレートマスター）

1年間を通して、多くの知見を得ることができた。私は他大学から群馬大学に来たのだが、学部時代は教員になるための知識や技能を学ぶことが多く現場は実際どうなのかを聞く機会が少なかった。しかし、教職大学院には現場から来られた先生が多数いるので、授業の中で学校現場の生の声を聞く機会がたくさんあった。そのため、学部時代には聞けなかった現場の本音や現職の先生方の学級経営のコツなど、いろんな視点から教師とは何かを考えることができた。

この1年を通して「教師の在り方は何なのか」ということを一番考えさせられた。その中でも特に「児童生徒がいて学校がある」ということを深く認識することができた。自分が教師になりたい理由を振り返ると「自分のため」ということにつながってしまい、これはただの自己満足になってしまい、本来いるはずの児童生徒がいなくなってしまう。もちろん、この考えではよくないことがわかっているが、もし、教職大学院に行かずに現場に出てしまっていたら「こうあるべきだからこうだ」という主観を押し付けてしまい、児童生徒の負担にしかかっていない支援をしていたのかもしれない。そのため、教職大学院の学びは私の中の教師像を大きく変えてくれるいい期間となった。

また、教員同士の連携について改めて考えることができた。学級担任を持つと「自分がなんとかしないと」ということを考えてしまい、自分一人で抱え込んでしまいがちという話があった。そうならないためにも日々、児童生徒の些細な情報を校内の誰かに相談することができる機会を作る関係性が必要になると感じた。

以上のように大学院では学部時代には考えることがなかった多くの知見を得ることができた。この1年間の学びを生かして、来年度から本格的に始まる研究と引き続き行わせていただく非常勤講師を取り組んでいきたい。

2023年度（令和5年度）修了生課題研究題目

佐藤 舞	病弱特別支援学校における関係機関との連携体制を軸とした精神疾患及び心身症の児童生徒の支援体制構築の試み—関係者間の共通ツール「ガイドブック」の活用を中心に—
------	--

入試情報

令和6年度入学者用の入試は2023年11月に行われました。令和7年度入学者の入試情報の詳細につきましては、以下QRコードの入試情報またはお問い合わせ先を参照にしてください。8月には大学院教育学研究科の説明会も実施する予定です。



お問い合わせ先

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 群馬大学共同教育学部教務係
TEL：027-220-7225（入試担当）